ワース・グラント宣教師の生涯　1918-2005

～ 仙台教会の歴史シリーズ　その 2 ～

小林孝男

１．ワース・グラント師の経歴

ワース・グラント[1]宣教師の日本での働きに関しては、ご自身の著書[2]の中で多くのことが記されており、特に仙台教会の初期の歴史を知る手掛かりとしては、大変有益な資料となります。ただ、ご本人のアメリカでの経歴は詳しくは書かれておらず、そのあたりのことをもう少し調べようと思ったのですが、これがことのほか苦労しました。やっとオンライン上で見つけたのが、古い「ミッショナリー・アルバム」[3]の 1 ページで、グラント夫妻の顔写真とお二人の経歴が極小文字で記録されていました。もう一つは、「パーム・ビーチ・ポスト」[4]という地方紙に掲載されたグラント師の死亡広告記事です。これら 3 種類の資料をもとに、グラント宣教師の経歴と生涯を簡単にまとめておきます。

ワース・グラント師は 1918 年 10 月 26 日、アメリカ合衆国南東部、ノースカロライナ州ハイポイントに生まれます。ファーマン大学を卒業後（1941）、ケンタッキー州ルイスビルにある南部バプテスト神学校に学び修士の学位を収めます（1944）。グラント師はスポーツ好きでフットボール、ゴルフ、陸上を得意としていました。ゴルフに関してはホールインワンを 2 回経験し、また学生時代にはノースカロライナ州の大会において、陸上競技の円盤投げで 3 位を獲得しています[5]。

牧会の経歴も多様で、ノースカロライナ州トーマスビルのリバティー教会牧師（1941-1942）、ケンタッキー州ルイスビルのオプティミスト・ボーイズクラブ主事（1942-1943）、ノースカロライナ州キンストンのバプテスト孤児院の牧師（1944-1945）、アメリカ海軍チャプレン（1945-1946）、ノースカロナイナ州のウェルドン教会牧師（1946-1950）などです。海軍チャプレン時代、1946 年（昭和 21）1 月に短期間の日本滞在を経験しています[6]。主は既にグラント師の心に召命の種をお播きになられておられ、この時の短期間の日本訪問も、主のご計画の一部だったのでしょう。

２．来日とその働き

宣教師としての献身はグラント師自身への招きであると同時に、妻キャサリン[7]に

対する招きでもなければなりませんでしたが、これに関しては全く問題はなく、「妻は私以前に神に招かれていたと思えるほど、私と意見の相違がなかった」と師自身が語っています[8]。そしてついに1950年（昭和25）3月22日、南部バプテスト連盟外国伝道局から、日本への宣教師として二人は正式に任命されることになります[9]。

1950年（昭和25）8月23日の来日時[10]、ワース・グラントは31才、妻キャサリン30才、長女ドナ7才[11]、そして次女アンジェラは4才でした（三女デボラ、四女キティーはまだ生まれていません）。最初の2年間は難解な日本語の学習に時間を費やしますが、記録では逗子教会の牧師の肩書も与えられていたようです（1950-1952）。その後宣教師として、仙台教会（1952-1959）、浦和教会（1959-1961）で働き、ヨルダン社の副責任者及び女子大学での教員としての役割を果たします（1961-1968？）。1968年（昭和43）から1970年（昭和45）までの3年間は、渋谷伝道所の牧師として働きましたが、グラント師にとっては、宣教師としての先の17年間の経験は、牧師としての最後の3年間のためにあったようなものだと回想しています[12]。

帰国後ワシントンD.C.でウィクリフ聖書翻訳協会で働き、テンプル・バプテスト教会牧師を最後に引退しますが、その後香港に日本語教会を設立するために臨時宣教師として派遣されています[13]。こうして主のご用のために、グラント師の人生は豊かに用いられました。

2005年（平成17）12月18日、フロリダ州ウエストパームビーチの自宅で、師は安らかに天に召されました。87年の生涯でした。なおこの日は、仙台教会において臨時総会が開かれ、新会堂建築の設計業者を決定した日でした[14]。ワース・グラント宣教師は、ご自身が信仰と情熱をもってその基礎を築き、1955年から歩み出した日本バプテスト仙台基督教会が、新しい時代に向かって新会堂建築を具体化させたことをしっかりと見届け、安心して天国に旅立ったのでしょう。

---

[1] Worth Collins Grant　1918/10/26生まれ、1927/9受浸、2005/12/18召天

[2] 日本バプテスト仙台基督教会50周年記念事業として、グラント宣教師の著書 *A Work Begun*（『主の息吹の中で』）及び *Japan with Love*（『ワース・C・グラント師の日本観』）を翻訳、合本版として2004年に出版。原書には著作時期が示されていないが、前者は1965～1967年頃、後者は1976年頃のものであろう。翻訳者は当時当教会の会員であった大久淳久さん。

[3] 資料（MissionaryAlbum）
[4] 資料（2005/12/21_FuneralNotice_PalmBeachPost）
[5]『ワース・C・グラント師の日本観』305 頁
[6] 同上 123 頁
[7] Kathryn Stephens Grant　1920/8/18 生まれ、1929 受浸（月日は不明）、2022/1/12 召天
https://www.palmbeachpost.com/obituaries/pwpb0322445（閲覧日：2022/5/31）
[8]『主の息吹の中で』12 頁
[9]『主の息吹の中で』10 頁
[10]『ワース・C・グラント師の日本観』140 頁
[11] 資料（2005/12/21_FuneralNotice_PalmBeachPost）　長女ドナは両親に先立ち 2005/4 に逝去
[12]『ワース・C・グラント師の日本観』187 頁
[13]週報（1995/06/11）
[14]週報（2005/12/18）